

十日ぶりに走と清瀬以外の住人がアオタケを留守にする。

誰もいないなら走が抱きついてても清瀬は怒ったりしない。もうすぐふたりきりになれる、それが解っているからお行儀よく我慢が出来る。

ちよつと動けば右膝と左膝があたるほどの至近距離で目の前に資料を広げ陸上議論を繰り広げながらときどきひっそりと毛布の下で指に触れたり足に触れたりしていた。そのちよつとで却って渴きを覚える。走は早く清瀬に触れたくて堪らなくなる。それでもここまで大人しく『待て』が出来たのだ、清瀬に叱られないようもう少し頑張るつとは思う。

思うのだが、残っているのはあと王子だけなのだ。朝食の席では今日発売の新作コミックを買いに行くとか云っていた。それがさつきから「どうしてないの」とか「僕ここに置いたよねえ」とか「引換券」いう声が漏れ聞こえてくるのでどうも予約票が行方不明になっているっぽい。

アオタケはみんなのもので、そんなことを考えてはいけないのは解っている。しかし、走はさつきからついで何度も早く出掛けてくれないかなあと天井に目を向けてし

まっていた。

「もう待てない?」

赤いドテラにくるまった清瀬が瞳を細めて小首を傾げる。走は思わず「それ可愛いから止めてください」と口走りそうになった。

恐ろしいことに最近清瀬が可愛く見える。

何がどうなったのか、走は清瀬のやることなすことそのすべてが可愛く見えて仕方がない。

ずっと愛用しているピンクのエプロン姿などむらむらするほど可愛いし、端整な顔立ちをしているくせにほつれたドテラが大好きというギャップも腹が立つほど可愛いし、怪我の所為で切りに行く暇がなくて伸びすぎた前髪を女子のごとくピンを使って額を出しているときとかもうどうしてくれようかというくらいに可愛い。

今みたいに首を傾げる仕草や長い睫毛を伏せ気味にした笑い方など、以前からたびたび目にしていたはずの些細な振る舞いにいちいちときどきしてしまふ。走る以外で胸が苦しくなったことなどない走には、ときめいて胸が苦しくなるとか意味不明な話だったが今ではとてもよく解る。清瀬が可愛すぎて毎日胸が苦しい。

箱根が終わって清瀬とこういう関係になる前まではそ